

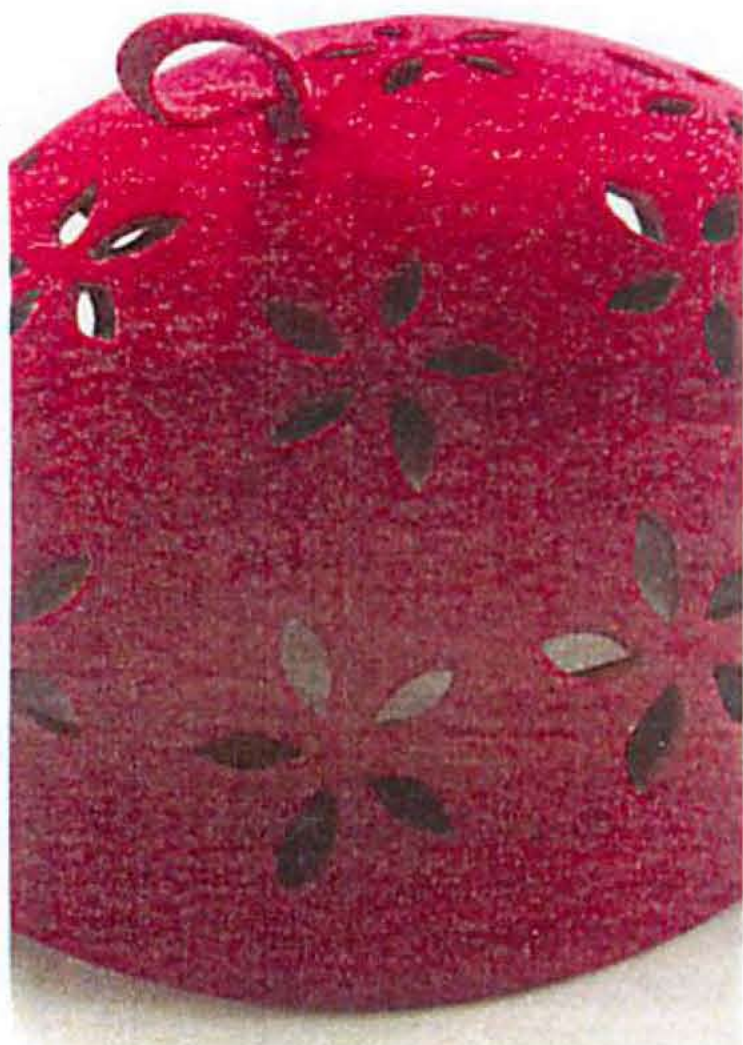
EX かんさい MONO語り

婦人用帽子 マキシ

手作りにこだわる「最高」品質

シーズンごとにめまぐるしく変化する女性ファッションに、帽子は欠かせないアイテムだが、70年以上にわたって頑固に婦人用の帽子を手作りしている老舗「マキシ」は、お

しゃれの街、神戸の変わらぬ顔として全国にファンが多い。皇室にも愛用される質のよい洗練された帽子作りを支えているのは、長い経験に裏打ちされた職人技だ。



色とりどりの帽子がディスプレイされた華やかな「マキシ」の店内。メンテナンスもしてくれるので、お気に入りを見つけ、長く大事に使いたい

- ④「マキシ」のオートクチュールを担当するモディスト（帽子デザイナー兼アドバイザー）、大平千鶴子さんの作品。大平さんはフランスの「ハットフェスティバル2010」で総合第1位に輝いた
- ⑤大阪万博で「タイムカプセルEXPO'70」に入れられたベレー帽のレプリカ（複製）
- ⑥秋篠宮紀子妃殿下が、タイを訪問された時に着用された帽子のレプリカ

マキシ 創業以来「神戸のハイカラ文化」を牽引してきた婦人帽子専門店。華やかでゴージャスなフォーマル帽からカジュアルな帽子まで幅広くそろい、オーダーメイドにも応じている。全国の主要百貨店でも購入できる。

兵庫県神戸市中央区北長狭通2の6の13。

☎078・331・6711

www.maxim-hat.jp/



職人の技術が生む軽さとフィット感



100度以上の蒸気が立ちこめるアトリエ。一つ一つ丁寧に帽子作りをするシャプリエたち



ソフト帽の縁を縫製する山口さん。年季の入ったミシンは50年以上使っている。デザインや素材の特性によって帽子の作り方は様々だが、どれも手仕事で丁寧に作られている

創業は1940年。元町のトアロードにある店舗を訪ねると、上階の工房で、57年のキャリアをもつシャプリエ（帽子職人）の山口巖さん(77)が出迎えてくれた。これまでに制作した帽子の数は10万個を超えるという。

一瞬の成形、力加減

さっそく仕事ぶりを見学したが、手作業での帽子作りには一瞬の技が要求されるのに驚かされた。

ウールやウサギの毛など、世界中から厳選された良質の帽子素材に熱い蒸気を当てて木型にかぶせ、冷めないうちに体重をかけながら両手でつばを引っ張る。あっという間に形ができあがった。

「力加減が大事なんです。力を入れすぎると破れます。これは慣れるしかないですね」と、山口さん。蒸気の温

度は100度以上もあり、すっかり手の皮が硬くなったと笑う。

その後10～15分、乾燥室に入れた後、丁寧にブラシをかけて生地を整える。帽子の縁の不要な部分をハサミで切り取り、縁や内側にワイヤやテープを巻き付けてミシンで縫製。再び蒸気を当ててブラシをかけ、型崩れしないよう所々に糊を塗る。最後に飾り付けをして完成だ。

「お客さまに気に入っていただけるのが一番うれしいです」と話す山口さんは、優れた技能者「神戸マイスター」に認定されている。一つ一つ愛情を込めて作られた帽子は、軽くて柔らかく、フィット感は手作りならではの。

皇室、CAも愛用

「マキシン」の創業当初の顧客の多くは外国領事館の夫人たちだったとい

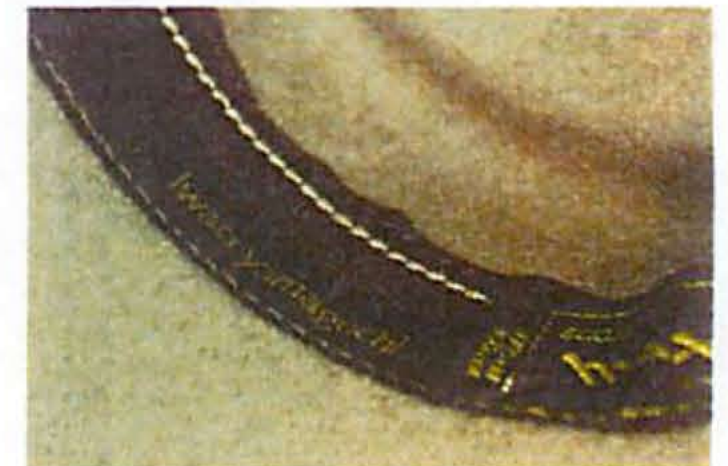
う。戦後、ハイセンスな神戸マダムたちの評判となり、現在は親子代々というファンもいて、あこがれの帽子店として幅広い年齢層に人気だ。皇室でも愛用され、航空会社の客室乗務員の制服、オリンピックや国際博覧会の制帽なども手がけている。

帽子人気が高まる一方で、手作りの帽子店がほとんど見られなくなったのも存在価値を高めている。「確かに生産性は低いです。でも、こだわり抜いた帽子作りは祖父（初代）の代から引き継いだもの」と現社長の次女、渡邊江美さん(35)が語る。

「最高の、という意味の『マキシン』という店名に恥じぬよう、これからも最高の帽子を世に送り続けたいですね」

文 杉山みどり
写真 甘利慈

「神戸マイスター」の山口さんの作品には「Iwao yamaguchi」のブランドタグもつけられる



@EX_editor

神戸の老舗帽子店「マキシン」のシャプリエ、山口巖さんのはにかんだ笑顔と木訥な語り口調が印象的だった。その人柄は、山口さんの作る帽子にも表れている。山口さんの帽子が似合う女性になりたい。



帽子の木型は1000個以上。ペレー帽、つば広帽、キャスケットなど様々な種類の帽子は、この木型から生まれる



熟練のシャプリエが夏用の帽子を作製中。細い麻ブレードを渦巻き状にミシンで縫い付け帽子の形に成形していく。見事な技術に思わずため息



今年9月、特注で初めて紳士用の帽子を製作。黒（2万9400円）、茶（3万6750円）、グレー（3万9900円）